

活字文化公開講座 in 専修大学 本で世界膨らむ

PR

トークセッションで盛り上がる米村みゆき准教授、川上未映子さん、川上隆志教授(左から)＝川崎市多摩区の専修大学で



トークセッション

川上隆志 (かわかみ たかし) 1960年、川崎市生まれ。東京大学文学部卒。岩波書店で新書編集部、総合文化雑誌「へるめす」編集長、一般書編集部編集長などを歴任。2006年から専修大で教鞭をとり、出版文化論、日本文化論が専門分野。

米村みゆき (よねむら みゆき) 名古屋大学大学院文学研究科博士課程を経て博士(文学)。近現代文学、アニメーション文化論を研究テーマとし、スタジオジブリ作品の批評などでも知られる一方、非商業系アニメーションの再評価にも力を注いでいる。

川上未映子 (かわかみ みえこ) 1976年、大阪生まれ。2002年に歌手デビュー。07年、小説「わたくし率」でデビュー。08年、小説「乳と卵」で同賞受賞。昨年詩集「先端で、さすわ さされるわ そらええわ」で中原中也賞を受賞したほか、長編小説「ヘヴン」を刊行。

川上未映子さん×文学部・川上隆志教授×米村みゆき准教授



川上未映子(かわかみ・みえこ)1976年、大阪生まれ。2002年に歌手デビュー。07年、小説「わたくし率」でデビュー。08年、小説「乳と卵」で同賞受賞。昨年詩集「先端で、さすわ さされるわ そらええわ」で中原中也賞を受賞したほか、長編小説「ヘヴン」を刊行。

基調講演 川上未映子さん

言葉にならない思いを力に

自分が世界に対して抱いた、言葉にならない違和感、半減してくれて、明日も生きていけると思わせてくれたのが、10代の終わり頃に巡り合った永井均や哲学の入門書でした。自分もそういう世界に身を置いて、人のよくなるからというところ

自分に世界に対して抱いた、言葉にならない違和感、半減してくれて、明日も生きていけると思わせてくれたのが、10代の終わり頃に巡り合った永井均や哲学の入門書でした。自分もそういう世界に身を置いて、人のよくなるからというところ

自分が世界に対して抱いた、言葉にならない違和感、半減してくれて、明日も生きていけると思わせてくれたのが、10代の終わり頃に巡り合った永井均や哲学の入門書でした。自分もそういう世界に身を置いて、人のよくなるからというところ



昔は多くいました。かつては書くのは作家、つくるのは自分だという意識も強かったけど、最近ではビジネスライクになったという声を、ベテランの作家からはよく聞きます。

川上未映子 作品に対する見をあまり言わなくなりました。原稿を渡しても「ありがたうございませう」だけだったり、ということでしょうか。

川上隆志 僕らの時代は「著者から最初にもった原稿を、そのままガラにしては駄目だ」と先輩に教わったし、第一の読者として原稿を読んで、率直な感想を伝え、修正をお願いし、よりよい作品に仕上げる責任があるという自負を持っていました。

川上未映子 絶対に編集者に相談しない作家もいますね。何か言われるのをすごく嫌う人もいますが、自分は感想を聞きたいし、全然腹が立

生きることがつらかったり、悲しかったり、漠然としたモノは消えない。そんななかで音楽と出会い、自分でも作るようになりまし。ある人から「本当に救われた」という手紙をもらって、今も大切にしています。でも、音楽をやっている、何もしないという選択肢はありませんでした。「ユリイカ」に詩を書かせてもら

今、起きているリアルな世界に向き合う時、意見を申し立て関与する方法ではないやり方が、文学では出てくるのではないかと考えています。「ヘヴン」も試みの一つです。現実に対して、小説というのは、一つのフィクションを丸々つくって提示させることができるからです。威勢がいい人、声の大きい人を勇気づけるような表現には、あまり用は

今、この中でも少し小説を書きたいという気持ちの人がおられたら、自分にとって、世界にとって、これだけは決着がつかないと思うことを目指してください。言葉にならない思いを抱えている人のためにと言っていると、なんだか偽善的な調子になってしまっていますが、それは書き手を肯定する力になり得ると信じています。私もそういう作品を書いていきたいと思っています。

川上未映子 胸を大きくすることによって、何を満たそうとしているのか、自分にはすごく不思議に思っています。整形も同じで、そんな疑問が膨らんで「乳と卵」を書かせたところがあります。

米村 作家がオリジナルな文体をつくるのに、非常に苦労しているという話をよく耳にします。村上春樹さんにも、試行錯誤の末、「風の歌を聴け」の出だしの部分を英語で書いて、短い日本語に翻訳し

川上隆志 私のお勧めは柳田国男の「遠野物語」。刊行されて今年ちょうど100周年です。近代文学の出発点でもあり、面白い妖怪話も数出てきます。水木しげるも面白いけど、柳田国男も面白い。そういう気分です。

●専修大学活字文化公開講座お薦め本

書名	著者	出版社
絶叫委員会 天使的な言葉たち 天授の考察	穂村弘	筑摩書房
タイタンの妖女	カート・ヴォネガット・ジュニア	早川書房
たけくらべ 現代語訳	樋口一葉原作 松浦理英子ほか訳	河出書房新社
子どものための哲学対話	永井均	講談社
日日雑記	武田百合子	中央公論新社
遠野物語	柳田国男	角川書店
空と風と星と詩※	尹東柱著 金時鐘訳	もす工房
美酒と革囊	長谷川郁夫	河出書房新社
レキシントンの幽霊	村上春樹	文芸春秋
赤い指	東野圭吾	講談社
母が重くてたまらない	信田さよ子	春秋社

※は伊吹郷訳版(影書房)が現在入手可能

川上隆志 最後にお薦めの本を紹介していただきたいと思ひます。

川上未映子 今日挙げた5冊はどれも必読してほしいです。たけくらべは、原文で読んでも全然分らないんですけど、松浦理英子さんが、句読点の数を変えずに現代語訳を書いてくれて、幾ら感謝してもきれいなくらいです。これで、樋口一葉が何をやってたのかを、はっきりと直感することができました。

米村 村上春樹さんの短編集「レキシントンの幽霊」に取られている「七番目の男」は、少年期に津波で親友を失った罪悪感から40年もの間、悪夢の中で生き続けてきた男が、ある日届いた荷物の中から、かつて親友が描いた絵と出会うことによって、自分が抱えてきた記憶に修正を施す話です。既存の世界を変えていく力を教えてくれます。